
どうしてこうなった（仮）

happyapple

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうしてこうなった（仮）

【Nコード】

N7251Z

【作者名】

happyapple

【あらすじ】

守銭奴ことリヒト・クーゼンの愛（笑）と勇氣（爆）の物語だったりなかったり。基本的、だらっとした物語……だと願いたい。

彼はというと（前書き）

気分を書いてみた。後悔も反省もしている。しかし、やめない。

彼はというと

二つの影が対峙。片方は獣である、そしてもう一方は人間。そして、交差する二つの影。数瞬後、獣の方がドサリと倒れる。その首は鋭い刃物で切られたようにぱっくり開いており、そこから血が溢れ出て

いた。血溜まりができる。人間のほうはというと、獣の首を切った刃物の刃から血を拭き取っているところであった。そして、空に向かいこんなことをのたまった。

「俺、薬草取りの依頼受けたんだが…」

しかし、空からはカラスの鳴き声以外何も返ってこなかった。

第1話 彼はというと――

先程の人間、性別は男である。風貌は整っているとは言えないが、別段汚らしいというわけでもない。適度に整っている、という程度だ。服は茶色の無地の上着に、同じく茶色のズボン、腰には先ほど使っ

た刃物、ナイフが鞘に収まりぶら下げてある。見た目170センチほどの身長、別段珍しくもない黒髪の頭をしている。その瞳は青。澄み切った、淀みのない『青』である。

そんな人物が賑わう街の大通りのど真ん中を歩いていたらどうだろう？ いや、別にどう、ということはないだろう。その通りの界隈のなかでは、そこまで目立つことのない、その程度の人物である。

太陽の節となり、さんさんと太陽が照る中彼は一切の迷いなくある場所に向かっていた。ギルドである。

ギルド——それは即ち、人の集まり。集会所と言っても良い。そこでは、あらゆる人物が依頼をしにやってき、あらゆる人物がそれを解決する。もちろん、その依頼に見合っただけの報酬をもらう、逆に

報酬なしでは動かないのがギルドの人員である。彼らのことは皆こう呼ぶ『冒険者』と。別段、冒険をするわけでもないが、その自由翻弄な生活からそう呼ばれるようになった……らしい。

この街——要塞都市ハイヴアルド——のギルドは街の中心部、すなわち市場のすぐそばにある。ともなれば、人が賑わい、雑踏と遭遇することは必然。彼は心の中で、鬱陶しい限りだと思っているに違いない。

「ああ、暑い……」

そして、この暑さである。参ってしまったくない訳がない。

そして歩くこと10数分、やっとの思い（精神的に）で彼はギルドへとたどり着いた。

その木の扉を両手で押すと、両側に扉が開き中に入る前に、思わずうっとする感覚が襲う。

そう——酒の臭いである。

このギルド、実は酒場も兼ねている。そして、真昼間だというのに飲んだくれがいることいること……

しかし、覚悟してしまえば酒の臭いなどなんのその、彼はまたしても迷いのない歩みで中に入り2階を目指す。階段を登ると、そこは1階の酒場より静かなカウンターと丸テーブルに席がいくつか置いてある。ここが、ギルドの本部というべき依頼を受ける場所である。それとともに依頼を頼む場所でもある。依頼をしにくる人の最大の難関は1階の酒場だろいうこと、同情しえない。

そして、2階の一番奥、カウンターにたどり着いた彼の所にいそいそと一人の女性がやってくる。その格好はウェイトレスである。

「ご要件はなんでしょうか？」

しかし、ただのウェイトレスと思うなかれ、彼女等はこのギルドの受付、さしずめ受付嬢と言ったところだろう。

「依頼の完了報告にきました。ええと、Gの35です。名前はリヒト・クーゼンで」

先ほど述べたように、彼は薬草取りの依頼をこなしていた、そして帰り道に獣に襲われたのである。厳密に言つと、あれは獣でなく、獣に類似した魔物だったのだが、それはまた別の機会に紹介しよう。依頼にはランクと番号がり、彼の言う『Gの35』とはランク『G』の『35』番目ということだ。

「後、依頼中にウルフに襲われたんで、その分報酬とか増え「ません」ですよー……働き損かよ」

彼主観ではボソッと言ったつもりだろうが、しっかり周りにも聞こ

えていた。誰も何も言わないが。それも当然、冒険者とは報酬のみで動く。報酬とは即ち金、金、金である。世の中金で回ってるはこのこと、なんとも悲しい世界だ。

「ではこちらが報酬の1銀貨です」

そうして、手渡しされる報酬。鈍い銀色に光る金属の円盤であるが、世の中これで回っていると思うと何か感慨深い。

その報酬を貰い、早々とその場を立ち去るリヒト。その表情には喜びの笑みが浮かんでいた。その理由は、この報酬、彼が初めて貰った報酬だからであった。更に言うと、リヒトは今日初めてギルドに登録し、初めて依頼を完遂させた。その報酬がたかが1銀貨だろうがなんだろうが、彼が自分で初めて稼いだ金には変わらない。

そうして、リヒトはまた街の界隈に紛れながら家に帰るのであった。彼の家、それは即ちラーガス・クーゼンの家である。この二人、苗字は同じだが血が繋がっているわけではない、この話もまだ別の機会に。その家は街の外れの方にあり、行くのには裏道などを通らなければ割と時間が掛かってしまうのである。となると、リヒトの性格である、裏道を通らない訳がない。

薄暗い、少し湿った地面を歩き、街の雑踏から少しずつ離れていく。

「ふっふふーん」

手の中で報酬の銀貨を弄るリヒトは気づかない、追跡者に。

「ああ、帰ったら何しようかねー。って言っても、することなんてあんましないかー……」

両手を首の後ろで組み、空を見上げているリヒトはまさに無防備、そしてそれを見逃さなかった追跡者達は一気に距離を詰めるために駆ける。

「待ちな坊主」

今から襲う予定の人物にまず声をかけるこの追跡者達は果たして馬鹿なのか親切なのか。

「ん？なんだおっさん。何か用か？」

まるで自分が今から襲われることを分かっているようにおどけた様子でリヒトは答える。

「金目の物全部置いて行きな、命だけは取らないでおいてやる」

なんとまあ、定番と化してしまったような台詞を吐く物取りである。

「んー…」

一瞬考える素振りを見せ、物取りの一人に向かい「嫌だ」と言う。

「じゃあ、しょうがないな……恨むんなら自分を恨めよ」

いや、そこは明らかにお前らが悪いだろうと呆れているリヒトの顔である。

「お前ら、なにか勘違いしてないか？」

呆れ顔から一気に真面目な顔に戻るリヒト。

「俺も、金が欲しいところだったんだ」

そう言い、一気に一番近い物取りの腹に一発拳を放つ。その一発で物取りは気絶にまで陥ってしまった。

「なんだ、弱いな……」

少しがっかりしたように声を漏らす。しかし、それも一瞬の出来事。次の瞬間にはほかの物取り共にも拳が、腹やら顔面に飛び、全員が一発KOを決められる。

「ああ、こつちのが金手に入るなんて、世の間違ってるよな」
そう言いながら物取り共のポケットやら腰の袋などを全部探り、金目の物を全部取っていくリヒトの手つきはどこか手馴れている。リヒトの手には銀貨が5枚ある。4枚は物取りから逆に取ったものである。

「まあ、恨むんなら俺を恨めよおっさん達」
まあ、聞いてないだろうけど、と付け足す。

そうして、彼はまた帰路に着いた。

彼はというと（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字、なんでも受け付けます！

第2話 翌日のことでした——（前書き）

連続投稿とかしてしまった。

第2話 翌日のことでした――

リヒト・クーゼンの朝は早い。

第2話 翌日のことでした――

朝食は自分で作らなければいけないのがこの家の決まりだ。非効率的でそっちのほう金がかかると言われようと、家の決まりを覆すことはリヒトにはできない。その由縁はラーガスにあった。ラーガスは

、リヒトにとつての父であり、師であると共に目標だ。そのラーガスが決めたことを覆すにはそれ相応の対価、この場合彼との勝負に勝つこと、が必要になってくる。しかし、このラーガス、年齢48にして武の極

みに至るほどの人物だ。しかも、なぜかチェスからカードまで如何なる勝負でもリヒトは勝つことができないのだ。

ということ、今日も今日とて自分で作った別に美味しくも不味くもない朝食を食べるリヒトであった。そんな時、家の玄関が開き、そこから大男と形容せざるをえない男が入ってくる。その腕は筋肉が隆々

と浮かび、まるで大樹の幹のようである。

「ああ、良い汗をかいた」

「暑苦しいぞ糞爺」

そう、その人物こそがラーガス・クーゼンである。

「五月蠅いぞクソガキ」

武の極みに至り、現在リヒトの師である人物。

「なに爺が朝からハッスルしてんだ」

リヒトの尊敬すべき人物。

「ふん、若いのに寝てるお主に言われたくないわクソガキ」

……なはずである。

そんな日常会話を交わし、ラーガスと入れ替わりにリヒトは家を出る。

そして昨日初めて行ったギルドにまた向かう。実のところ、彼がギルドに行く切欠になったのはラーガスにある。ラーガスに教えを請うていたリヒトだが、先日遂に卒業というか、仮卒業を果たし、ギルドに

入ることを許されたのだ。ギルドに入れば、自分で自分の金が稼げる、と思っていたリヒトはそれを聞き、次の瞬間には玄関を文字通り、飛び出していた。

「さーて、今日はどの依頼を受けようかねー」
掲示板とにらめっこをするリヒト。

「おー、これにするか」

そうして見つけたのは『迷子の猫探してます』の依頼だ。報酬はまた1銀貨である。1銀貨あれば、あと2食は食べられるのでリヒトとしては別にそれ以上の報酬ももらわなくてもいいのだ。そうしてリヒトは

カウンターに向かう。

そして、またいそいそとやってくる受付嬢。昨日と同じ人物である。
「何か御用でしょうか？」

「Gの23の依頼受けます」

受付嬢はカウンターの裏に行き、その依頼を確認する。そして、戻ってくる。

「はい、畏まりました。こちらの猫の搜索願で宜しいですか？」
そして、依頼の紙をペンと共に差し出してくる。

「宜しいです」

そうして、ペンで自分のサインを紙に書く。

「ああ、またウルフとかに遭遇したら報酬とか増え「ません」はい……すみません」

残業サービスなのか？タダ働きはしたくないリヒトであった。

ため息をつきながらカウンターに背を向け1階に降りようとする彼に受付嬢は「いつてらっしゃいませ」と丁寧にお辞儀をする、リヒトは知らないが。

1階に降りたりヒトはふと酒場のカウンターを見た。

「ああ、暑いなー……」

今日も昨日と似たような天候で、暑い。カウンターには冷えた水が置いてあるではないか。そしてそれを持っていくウェイトレスたち。リヒトは己の欲望にたやすく負け、カウンターについた。

「水一杯くれー」

カウンターに突っ伏し手をひらひらさせながら頼む。

「はい、お待ち。銅貨6枚だ」

いや、待っていないぞという風に驚くリヒト。

「今1銀貨しかないから釣りくれ」

そう言つて、カウンターに1銀貨を置く。それをカウンターのウェイターが取り、懐にしまい、その代わりに銅板9枚と銅貨4枚が返ってくる。通貨は、銅貨10枚で銅板1枚、銅板10枚で1銀貨、銀貨100枚で金

貨1枚と言った感じだ。

「んっ……くっ……ぷはぁ！」

出てきた水を一気に飲み干す。

「ああ、生き返るわー」

まだ、家から出てきて1時間ほどしか経って居ないことを彼は知らない。断じて知らないのだ。

そんな時であつた。

「あぁん！？こんなところにんなモン連れてくんじゃねー！」

酒場の入口あたりで一人の男が大声を出したのだ。

酒場にいる全員の視線がその男に向く。そこには、3人の男が少女を囲っていた。

「ここはギルドだぜ、お嬢ちゃん。お子様が犬の散歩で来るような場所じゃねえよ」

「わ、私はお子様じゃありません！ちゃんと17です！」
論点はそこなのだろうか？と疑問に思ったりリヒトであった。

「そ、それにギンは犬じゃありません！狼です！」
少女の横には銀色の毛の狼が一匹。ははあ、とリヒトは納得したように頷く。

「どっちにしろペットなんて連れてくるんじゃないやねえ」
一番でかい男が狼を見下ろす。

「ギンはペットじゃありません！私の立派な相棒です！」
それから、また口論は続き、男の無駄な剣幕のせいか間に入るうにも入れない観客であった。

しかし、そこに一人の人物が間に入る。言わずもがな、リヒトだ。

「おい、おっさん」
一番でかい男の肩を叩く。

「ん？なんだガキ」
当然のこと、リヒトのことを知る人物など、あの受付嬢しかいない。

「流石に、犬が苦手だからって追い出すのはだめだろ？」
その瞬間、酒場の空気が凍った。

「人が何を連れていようと自由じゃないのか？それに見ろ！この毛並み！超モフモフだぞ！うおお、すげー」

そう言ってしゃがみ、嫌々している狼の首当たりに抱きつく。

「……………」

「……………」

「……………」

「あれ？」

何も言い返さない男達に気付きリヒトも違和感を感じる。

「俺って、今ものすごい滑った？」

「ガキが……………」

男がプルプルと震えながら、怒りをこらえている。

「黙つとれえ！」

そうして男の拳が放たれる。しかし、そこまでの実力者ではないのか、それほど速い拳ではなかった。

「ほい」

外受けでその拳を逸らし、男の懐に入り込み、空いている手でナイフを抜き首にあてがう。

「まあ、そう熱くなりなさんな。こんな暑いんだからさ」

そうして、男は尻餅を付きながら倒れる。所謂、戦意喪失だ。

リヒトは少女のほうを向く。この少女、よく見ると美少女である。肩口まで伸びている茶色の髪はよく手入れされているのか見た目でもサラサラだと分かる。碧眼には強い意志を感じたり、感じなかったり。

「ほれ、お前も行け」

そう言っ、少女に先に行くことを促す。

「あ、ありがとうございます！」

一度お辞儀をして、先を急ぐ少女。それに付いていく狼。

「猫よ待っているー」

そうして、リヒトも出口から出ていき、その場に残されたのは沈黙する酒場の観客、尻餅をついた男とその仲間2人であった。

第2話 翌日のことでした——（後書き）

感想、指摘、誤字、脱字、なんでも受け付けます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7251z/>

どうしてこうなった（仮）

2011年12月24日03時50分発行